富丘15号道路が整備される以前のようす
『イワケシュ郷土史』からの抜粋・編集

（略）15号道路は、昭和25年になって、富丘小中学校の創設と共に町費によって起工された。その工事は部落民多数の出役奉仕によって苦労の末完成したもので、その後再三にわたって改良工事が加えられてきたが、最終的には昭和47年になって完全舗装された。

現在、富丘において最良の道路である15号線も、昭和６年頃は伊藤政治沢を斜めにやっと人の通れるような状態であった。

部落内において、西３線に向かって道路を造ることに衆議一決し作業に入ったのである。雨が降って農作業ができない日には、組合総出でスコップ、ツルハシなどを持ち寄り、急斜面の切り崩しに一同懸命になって働いたのである。

しかし、その作業も雨天後のため重粘土はヘドロ状態であり、作業は難航し、一同へとへとになるまで疲れ切ったものである。

当時のようすを高橋長次郎は次のように語っている。「ヘドロサカンカマシテ、砂金サデモ出タラハー、ドンダベー」と一同を笑わせて元気づけたとか。（略）

『富丘小学校開校30周年記念誌』からの抜粋・編集

＊「過去を語る座談会」から

堀田：15号道路を直すのは大変だった。晴れの日はみな畑仕事なので、道路工事は雨の日にやる。ツルハシやスコップが泥だらけになって服も顔もぐしゃぐしゃだった。

初代の加藤校長は、そんな道を何回も上り下りして買い出しに行ったもんだ。

＊開校30周年記念誌に寄せて　加藤イク

（略）亡夫が置戸小学校教頭から本校初代校長に任命され赴任いたしましたのが昭和25年４月、（略）木の香りも新しい校舎が笹藪の中にぽつんと建っていたのを思い出します。学校まで行き着くのに馬車などの通れる道がなく、横畑さんの畑の縁を通ったことを思い出されます。（略）

＊白樺に魅せられて　三浦晶子

豊川というところでバスを降りた私は、そばにあった小さなお店で富丘小学校へ行く道を尋ねました。それから自転車を借りて汗をふきふき富丘へ向かったのですが、起伏の激しい山道にとうとう途中で自転車を道ばたに置き、歩いて学校まで行ったのです。お店でも見慣れない女の子がポッと現れて自転車を借りて行くなど、きっとびっくりされたことだろうと今にして思うのです。何しろ今の乗用車にも匹敵するほどの値だった自転車なのですから…。無鉄砲というか、世間知らずというか、とにかく元気いっぱいのおてんば娘がこうして富丘小学校を訪れたのでした。（略）学校はできたばかりなので木の香りも新しい…といえば聞こえもいいのですが、板壁１枚の粗末なもので節穴から外が見えるという、今ではとても考えられないものでした。

しかし、終戦後わずか5年後のあの時代では、今の鉄筋2階建て、3階建ての校舎もより立派に見えたことでしょう。まして、この地に学校を…とあらゆる努力を重ねて来られた当時の父兄の方々には、やっとの思いで産声をあげた学校が光り輝いて見えたことと思います。（略）

豊川・富丘間の勾配の急だったあの道は忘れられません。まるで登山道のような山あいの道、谷川のせせらぎをまたいで渡る、そんな感じの道でした。家庭訪問に（というよりもっぱら遊びに行ったのですが）買い出しに、また帰省のたびごとに1歩1歩歩いた細い馬車道です。とても遠い道でした。最近この道を通る機会がありましたが、なだらかな舗装道路が真っ直ぐに走っていて、学校も住宅も周囲のようすもすっかり変わっていて、あの頃の面影は一つもないといってもいいくらいでした。（略）

＊開校当時の思い出　安原英雄

（略）父兄の方々が木の根を抜き取り、2頭曳きプラウで耕して整地して、狭いながらもグランドができて運動会が開かれました。加藤校長先生が紅白の玉の入った箱を肩に担いで、15号の沢をよじ登って川沿校へ返しに行かれたのを思い出します。